

聖書：使徒 16：16～40

説教題：主イエスを信じなさい

日時：2014年4月6日

マケドニア人の叫びに導かれて、パウロの一行はピリピへやって来ました。そこでまずルデヤという女が救われました。そしてもう一つ、この町で導かれた救いのみわざは牢屋の看守とその家族の救いです。今日はその牢屋の看守の救いの出来事に焦点を当てて見て行きたいと思えます。

きっかけとなったのは、占いの霊につかれていた若い女奴隷の解放の出来事です。彼女によってその主人たちは多くの利益を得ていました。その彼女がパウロたちの後について来て、いつもこう叫び続けたのです。「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人々です。」 ヤコブ書 2 章 19 節：「あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。」 II コリント 11 章 14 節：「サタンさえ光の御使いに変装するのです。」パウロたちは最初はそれほど害がないと思って見過ごしていたのでしょう。しかし「幾日もこんなことをするので、困り果てた」と 18 節にあります。これはパウロたちが困ったというより、幾日もこんなことをする霊が取り付いている女奴隷をかわいそうに思ったという意味にも取れます。そこでパウロは「イエス・キリストの御名によって命じる。この女から出て行け。」と言って悪霊の追い出しをしたのです。

これが大変なことになります。彼女の主人たちは、もうけることができなくなったのを見てパウロとシラスを捕らえて訴えます。20～21 節：「そして、ふたりを長官たちの前に引き出してこう言った『この者たちはユダヤ人でありまして、私たちの町をかき乱し、ローマ人である私たちが、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しております。』」この結果、長官たちはよく調べもしないでパウロたちをむちで打つように命じます。本来、ローマ市民はこのような扱いは受けないことになっていましたが、長官たちは調べず、またパウロたちに弁明の機会も与えないほど強引にこの処置を進めたのです。その結果、二人は裸にされ、何度もむちで打たれた末、牢屋にぶち込まれてしまったのです。

さてこの状況でパウロたちはどのように振る舞っていたでしょうか。25 節：「真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。」私たちがこのような状況に置かれた時、どうでしょうか。おそらくまず出て来るのは不満やつぶやき、嘆きではないでしょうか。そしてこう思うかもしれません。こんなことならヨーロッパに渡って来なければ良かった。幻の中のマケドニア人の叫びになど聞かなければ良かった。なぜ良いことをしただけなのに、こんな仕打ちを受けなければならないのか。そうして怒り、嘆き、絶望する。ところがパウロとシラスは一番奥の牢で足かせをかけられているのに、何と神を礼拝し、賛美をしていたのです。その体には鞭で打たれたことによる血がにじみ、傷がいくつもあつたであろうにもかかわらずです。ピリピ 4 章 4～7 節：「いつも主にあつて喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いに

よって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあつて守ってくれます。」「いつも」というのは、状況によらずに、ということです。嬉しい時はもちろん、困難な状況でも、ということです。これは単なる命令であるよりは、主にあつて私たちは喜べるはずだ！という励ましです。こう述べるパウロは何も悩みがなかったわけではありません。6節に「何も思い煩わないで」とあるように、ともすれば思い煩いたくなる誘惑も彼にはあつたのです。しかし思い煩って時を過ごすのではなく、神に知っていただきなさい！とパウロは言います。祈りの中でそのことを神にお話し、神の大きな御手に自分をあずけてしまいなさい。その際、大事なことは感謝とともに！ということです。その時、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあつて守ってくれます。私たちにとってのチャレンジは、もし私たちが彼らのような状況に投げ込まれた時、彼らのように主にあつて喜ぶことができるかということでしょう。嬉しいことが起こった時に神に祈り、賛美をささげることは簡単です。しかしそうでない時も、私たちは祈り、賛美し、主にあつて喜ぶことができるのです。困難な時、意気消沈しそうな時、絶望しそうな時に、私たちはこの御言葉を思い起こし、この御言葉の約束に生きたいと思います。そしてその時、そこから主のみわざが始まります。この後、牢屋には大地震が起こります。なぜでしょう。それはパウロとシラスが祈っていたことと無関係ではないでしょう。すなわち人間的には最悪と思われる状況にあつたパウロとシラスでしたが、彼らが主を賛美し、御名を呼んだ時、そこに主の大いなる臨在が現れたのです。何も良いことがないと思われた牢屋の奥に神の奇しい働きが現れたのです。

大地震が起こった時、26節を見ると、「獄舎の土台が揺れ動き、たちまちとびらが全部あいて、みな鎖が解けてしまった」とあります。真夜中に目をさました看守はこれを見て、囚人はみな逃げたと思ったのでしょうか。そこで彼は自殺しようとしています。古代世界では看守が囚人を逃がした場合、看守が囚人の代わりに刑罰を受けなければなりません。このピリピの看守は、囚人を逃がした責任を必ず問われることを察知し、自分で自分の命を終わらせようとしたのです。その姿を見て、牢屋の奥にいたパウロは大声で叫びます。「自害してはいけない。私たちはみなここにいる。」と。これを聞いて看守はあかりを取り、駆け込んで来て、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏し、問います。「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか。」

看守はどういう意味でこの言葉を語ったのでしょうか。彼は今、囚人を逃がしてしまつたかどで処刑されるかもしれないという恐怖を味わいました。だから「どうしたら救われるか」というここでの問いも、そういう地上の命の救いのことを考えていたのではないかと言う人もいます。しかし囚人たちはまだ逃げていませんから、彼らを急いで牢に閉じ込めれば、さばきからは逃れられるはずですが、ですからこの看守の問いはもっと深い次元の問いと言えます。この問いは私たち一人一人がなすべき人生で最も重要な問いと言えます。おそらく看守は今の今まで、自分がこのような問いを発するという事など考えてもみなかったでしょう。彼はもともと求道者でも何でもなかったと思われまふ。しかし彼はこの時、牢屋の扉が開いて、囚人たちが逃げてしまつたと思った時、生と死の境まで行つたのです。自分は今でもう死ななくてはならない。まだやりたいことは色々あつたらうに、愛する家族の事などが心にあつたらう

うに、それらを全部置いて死ななくてはならない。その時、彼は絶望したのです。そしてこの死に際して、自分は何も準備していないこと、何の備えも解決もないまま、死ななければならないという現実と直面したのです。ところがそんな自分の前に、逃げられるのに逃げない囚人たちがいる。それはあのパウロとシラスです。彼らは「私たちはみなここにいる」と言い、だから「自害するな！」と私のことまで心にかけている。看守はこの二人の前で自分を見た時、自分は自由な状況にいながら真の命を全く持っていないこと、しかしこの人たちは牢屋に入れられて不自由のように見えながら、自分が知らない本当の命を知り、かつそこに生きている人たちであることを思わずにいられなかった。そこでこの問いを問わずにいられなかったのです。「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか。」これは私たちにとっても、他のどんな問いよりもはるかに勝って大事な問いです。これこそ私たちが真っ先に解決しなければならない問いです。ところが私たちはその自分の一番の必要を自覚していません。しかし看守は大地震が起きて、獄舎の土台ばかりか自分の人生の土台が揺り動かされた時に初めて、一番の自分の必要を自覚したのです。そして正しい問いができたのです。これは神の祝福であり、恵みです。

その彼の問いに対して語られた答えを最後に見たいと思います。31 節：「ふたりは、『主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。』』と云った。」先の看守の問いが人生で最も大事な「問い」とすれば、パウロとシラスの答えは、同じく人生で最も大事な「答え」と言えます。素晴らしいことは、パウロたちはここで余計なことは何も言っていないことです。聖餐論について話していません。神学の講義もしていません。教会について述べているのでもありません。もちろんこのようなことはだんだんと学んで行くべきものであることはその通りです。しかし注目すべきは、救いを求める切実な問いに対して、パウロとシラスはそのエッセンスをストレートに語ったことです。これは普段から何が一番大切で、人間にとって根源的な真理であるかをわきまえ、そこに生きている人たちであったからこそ、適切な時にズバツと答えることができたものであったのでしょうか。「主イエスを信じる」とはどういうことでしょうか。これは主イエスの上に自分を置くという意味です。そのために知る必要のある真理は、イエス様の十字架と復活のメッセージでしょう。イエス・キリストはあなたが受けなければならない罰を代わりに引き受けて十字架上で死に、またあなたが支払わなければならない罪の負債をすべて支払い切った方としていのちに復活された。そのお方によりかかり、信頼することによって、あなたはその刑罰を免れ、永遠の命に生かされることができる！ということです。看守は死の淵をのぞきこんで、何の準備もしていない自分を知ってわななきましたが、主イエスに信頼することによって死の滅びから救われる！そしてただ将来さばかれないだけでなく、今ここにある時から主にあつてパウロやシラスのような生き方ができる。パウロとシラスは「あなたが信じれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と言います。これはもちろん、一人が信じれば自動的に家族全員が救われるという意味ではありません。しかし聖書の他の箇所から分かることは、神は救いにおいて家族を考慮しておられるということです。血のつながりを霊の恵みが流れる通路として用いてくださり、一人が信じるなら、その家に特別な恵みを注いでくださるということです。看守はこの言葉にも励まされたことでしょう。そして彼は主イエスを信じ、主の約束を信じて家族に福音を伝えます。32 節にある通り、パウ

ロとシラスは彼の家族にも福音を伝えました。そして何と言っても看守自身が信じたというあかしが大きな力となったでしょう。そしてその家の者全員が真夜中にバプテスマを受け、全家族そろって神を信じたことを心から喜んだのです。この看守の家族はピリピ教会の重要な最初のメンバーとなったことでしょう。主は思わぬところから回心者を起こし、教会の基礎となる家族を起こされたのです。

35 節以降は今後のピリピ教会を思うがゆえのパウロの対処であったと思われます。パウロはただ釈放されるのではなく、適切な扱いがなされることを求めました。それは今後、パウロたちが残していくピリピ教会の信者たちに対して、当局者たちが続けて専横的な扱いをすることがないように、今後の彼らの歩みがいくらかでも守られるようにと願って取り計らったことと思われます。

以上のピリピの看守の救いの物語。私たちは最も大切な問いを発し、またその答えを得て生活しているでしょうか。日々、色々な悩み、うめき、心配、恐れを経験する私たちに対して聖書が語っているメッセージは「主イエスを信じなさい」ということです。私のために十字架上で死に、私のために復活して永遠の命を勝ち取ってくださった主、そして今やこの世界と宇宙の一切を御手に収めて、信じる者たちを天国につながる最善に生かし導いてくださる主。私たちはこの主イエスにより頼むことによって、どんな中でも平安と賛美を持って生きることができるのです。パウロとシラスのように歩めるのです。またその生き方を持って人々に希望を指し示し、人々が問うて来た時には、一番大事なメッセージを語り伝えて、神の国がさらに拡がることのために仕え、用いて頂くことができるのです。